

2021/03/14

ヨハネの福音書 講解メッセージ④

『弟子の足を洗う』ヨハネ 12:49-13:17

■ 永遠のいのち

「わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。それゆえ、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのままに話しているのです。」(ヨハネ 12:49-50)

イエス様は人間の姿で来られたので、皆、人間として見ていますが、ここでイエス様は、「私は神として話している」と言っておられるのです。神の命令である「永遠のいのち」は、イエス様が伝えたかった最も重要な福音です。この「永遠のいのち」が、ヨハネの福音書の中心テーマです。

最も重要な福音が「永遠のいのち」であるということは、「私たちはすでに死んでいる」という前提があるということです。「今、自分は生きている」と考えると、永遠のいのちの意味はよくわかりません。しかし、「あなたは死んでいる」と言われたら、まずどうしても必要なものは命です。神の目には、私たちは死んだ者なので、どうしても永遠のいのちが必要なのです。

聖書が教えている永遠のいのちとは、霊の体を着せられることです。なぜなら、人は意識だけでは存在することはできないからです。私たちが何かを考え、意識することができるのは、神のいのちという魂に、体が情報を持ち込むからです。精神という実体があるわけではないため、体が滅びると意識も消滅してしまうので、私たちが永遠に生きるには、朽ちない体が必要です。人が朽ちるものとなったのは、悪魔の仕業によって死が入り込んだ結果です。神様は、私たちに再び朽ちない体を着せるために、十字架で悪魔の業を滅ぼし、死を滅ぼしてくださいました。

イエス様は、「私を信じている者は、すでに永遠のいのちを持っている」と言われました。それは、すでに霊の体を着せられたということです。その結果、肉の体が滅んでも、自動的に霊の体にチェンジして、魂が霊の体にとどまり続けるので、意識は死ぬことがなく、そのまま継続されるというわけです。

さらに、霊の体は神の国に属するからだなので、霊の体を着せられると、この地上においても、神の国を確認できるようになります。ですから、永遠のいのちを持つとイエス様を信じられるようになるのです。

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ 17:3)

魂は、太陽の光のように、私たちに神の愛を発信し続けています。それは、理念（理想）として、すべての人の中に存在しています。私たちは皆、神が教えてくださる最高の理念（理想）を、この世界で確かめようとする行動によって生きており、そこに「意識」というものが生まれるのです。誰もが初めからその理念を持っているということは、私たちに理念をもたらした神がおられることを示しています。そして、永遠のいのちを持つと、私たちが初めから持っていた理念は神であり、イエスだったと確認することができます。だから、永遠のいのちとは、イエス・キリストを知ることであると聖書は教えているのです。

■ 永遠のいのちのステップ……患難

永遠のいのちは、次のようなステップで与えられていきます。

1. 神が死人に呼びかけます。神が人間の潜在意識に働きかけ、人がその語りかけに応答すると、霊のからだに着せられます。
2. 潜在意識が顕在意識に神の御言葉を聞くように語りかけ、顕在意識でもイエス様を信じたことを自覚します。
3. 永遠のいのちを持っていることを信じます。これを信じることでのみ、死の恐怖に打ち勝つことができます。
4. 神の言葉にとどまり続けます。そのために必要なことは、神の前にへりくだることです。
5. 神の前にへりくだるため、神は患難を静観するというステップを通ります。

神様が患難を静観するのは、キリストの体につながった私たちが、本来の自分に気づく喜びを体験するためです。たいていの人は、自分の計画を先に持ち、その計画に神様を参加させようとするものです。自分のやりたいことに対して、「神のために頑張る」と言って計画を立てたとしても、神様には神様の計画があります。そこで、神様は患難を静観して、その人が砕かれるのを待ち、神の計画に参加するように導かれるのです。

永遠のいのちを得るとは、神と離れていた体の一部が再び体に移植されたようなものです。例えば、手を移植したら、確かに手は健康を取り戻しましたが、すぐにスムーズに動くわけではありません。同様に、私たちはキリストの体の一部となっても、キリストを無視して自分で動こうとする癖が抜けず、ちぐはぐな動きになることがよくあります。しかし、患難によって神と深くつながり、キリストの体の一部として生きることによって喜びを感じるようになると、神の計画を自分の喜びとして感じられるようになるのです。それが、本来の場所に戻り、本来の自分に気づく喜びです。

「わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています」という言葉には、以上のような意味が込められているのです。

■ イエスを売ろうとする思いを入れる

「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。」(ヨハネ 13:1-4)

これは、イエス様が十字架に架かる以前の話なので、まだ悪魔が活動しています。悪魔は、ユダの心にイエス様を売ろうとする思いを入れましたが、思いを入れるだけで人間の心をコントロールすることはできません。例えば、エバをそそのかした時も、エバの心をコントロールして罪を犯させたのではなく、神と異なる思いを持ち込むことで、エバがそれを選択するように仕向けたのです。

私たちの意識は、体と魂によって存在するものなので、もし意識をコントロールしようとするなら、体を壊すしかありません。体はそのままに、意識だけをコントロールすることはできないのです。いずれにしても、悪魔は十字架によって滅ぼされましたから、今の時代、悪魔や悪霊が人に何か働きかけることはできません。しかし、死がある限り、神と異なる思いは常に私たちのうちにあるので、罪の選択を迫られている状況は、結果的には変わらないと言えます。

死の恐怖は、私たちに不安を与え、見えない神よりも、見える安心を求めさせます。「この世界で役に立つのはお金であり、神を愛しても何にもならないのだから、人から良く思われるほうがいいだろう？」と、私たちの心に常にささやきかけるのです。つまり、今、私たちの中に神と異なる思いを入れてくるのは、死の恐怖です。私たちを罪から救い出すためには、この死の恐怖をなんとかするしかありません。だから、永遠のいのちが神の命令なのです。

神様は、人をロボットではなく、人格を形成して、神と交われる者としてお造りになりました。ですから、神であろうと悪魔であろうと、人の意志に反することを勝手にコントロールすることはできません。それは、精神を止めることを意味するからです。悪魔がユダにできることも、思いを入れて、選択するように仕向けるだけです。

■ わたしが洗わなければ、何の関係もありません

「イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。こうして、イエスはシモン・ペテロのところに來られた。ペテロはイエスに言った。「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」

イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」ペテロはイエスに言った。「決して私の足をお洗いにしないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」(ヨハネ 13:4-8)

イエス様が十字架に架かる時が近づき、いよいよ弟子たちと交わる時間が残りわずかになってきた時、イエス様が、弟子たちに示された最後の愛は、弟子の足を洗うこと、つまり、仕えることです。この時、イエス様は、ペテロに、「今はわからないが、あとでわかるようになる」と言われました。ペテロが、後からわかったこととは何でしょうか。

私たちは、この世界で良い人間関係を築くことを目指しています。それは、そこから安心と平安を得るためです。良い人間関係のためには、相手の期待に応えることが大切です。人の期待を裏切ると嫌われるので、誰もが善人になろうとし、また、善人のふりをします。私たちはそういう世界で生きているので、神様との関係もそのようなものだと思って、神のことばを実行できればできるほど、神様は自分を評価してくださり、良い関係を築けると思っています。このように、行いによって神との関係を築こうとするやり方を、律法主義と言います。しかし、イエス様はこれを否定なさいました。

足を洗うとは、罪を洗い清めることを意味します。もし自分に罪がないと言うなら、それは神を偽り者とする事だと聖書は教えています。罪のいやしこそが、私たちと神様との唯一の接点です。神の目には死んでいる私たちですから、神様は死人に対して、何の行いも要求なさいません。ただ永遠のいのちを持たせて、汚れを取ってくださるのです。

イエス様は、このことを教えるために、この世で嫌われる人や罪人と積極的に関わりました。足の泥を洗うとは、罪を洗い、いやすことです。もし、罪を清める必要がない人がいるなら、その人はイエス様と何の関係もありません。しかし、ペテロはこのことが理解できず、ただイエス様と関わりを持つことを願って、「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください。」(ヨハネ 13:9) と言いました。それに対してイエス様は、「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」(ヨハネ 13:10) とお答えになりました。水浴とは、バプテスマです。イエス・キリストを信じた人は、すでに永遠のいのちを持っているので、罪に気づいたら、その都度、赦しを求めていやされればよいと、イエス様は言われたのです。

私たちが犯してしまう最大の罪は、自分を中心にしてしまうことです。自分で勝手な計画を持ち、神様をそこに参加させようとしてしまうのですが、これが罪だということに気づく人はまれです。イエス様は、罪の筆頭に「世の心遣い」を挙げ、金銭を愛することよりも、注意を促しておられます。イエス様がペテロに「下がれ、サタン。」と言われたのも、ペテロが自分の考えを中心にして、人に好かれようこの世の心遣いに立った時です。神という名を使って自分を中心にして生きていたことに気づいたら、神様に罪を差し出し、いやしを受け取りましょう。

■ ユダの裏切り

「イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みながきよいのではない」と言われたのである。」(ヨハネ 13:11)

「きよくない」とは、「救われていない」ということです。しかし、ユダは、イエス様を信じて告白して洗礼も受けています。救われていないとはどういうことでしょうか。

「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちとっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためなのです。」(I ヨハネ 2:19)

ユダだけではなく、ほかにもイエス様を裏切った弟子がいましたが、彼らはもともと仲間ではなかったと言われていています。つまり、最初から救われていなかったということです。救われても、行いが悪いと救いが取り消される、ということではありません。この世のいのちがキャンセルできないように、永遠のいのちもキャンセルされたりしないのです。

では、本当に神に応答しているかどうかを見極めるには、どうすればよいのでしょうか。それは、イエスが神であることを否定できるかどうかで判断できます。ユダはイエス様に期待しただけで、神であるとは信じていなかったのです。

当時のイスラエルは国家が失われていて、ユダヤ人が求めていたメシヤは、ローマ帝国を倒し、神の約束であるダビデの王国を再建してくれる人でした。ユダはイエス様にこの地上での王国を復興してくれることを期待していたのです。ところが、イエス様のなさることは、霊的なことが中心になりました。それは、ユダを始め、多くのイスラエル人の期待を裏切ることだったのです。そこでユダは、「私が期待していたのはこの人ではない」と、イエス様に見切りをつけ、裏切ったのです。ユダは神の声に応答して救われたのではなく、人間的な理解と都合からイエス様に期待しただけだったのです。

ですから、ユダは、悪い行いをしたために救いが取り消されたわけではありません。ユダが救われなかったことで、イエス様を信じてても良い行いをしなければ天国に行けないとか、罪を犯し続けるなら救いは取り消されると考える人がいますが、決してそのようなことはありません。

■ 互いに仕え合いなさい

「イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だ

からです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。」

(ヨハネ 13:12-17)

イエス様が弟子の足を洗ったのは、「互いに仕えあうように」ということを教える意味もありました。当時の弟子たちは、誰が偉いか互いに競い合っていました。しかし、「互いに必要な者なのだから、仕え合いなさい」「何をしても神に勝つことはない、人は互いに仕え合うことが祝福なのだ」とイエス様は教えられました。感謝して奉仕しているとき、私たちは祝福にあずかっているのです。仕えるとは、へりくだることです。イエス様は弟子の足を洗いました。これが、へりくだりです。へりくだることが祝福であり、それができないのが災いなのです。

自分を高くすることの象徴は怒りです。怒りとは、人の上に立とうとする行為です。また、へりくだるとは、神のことばが食べられる状態になったことを現しています。私たちに強くし、祝福する神のことばは、へりくだった時しか食べられません。へりくだりは、人への態度に現れます。イエス様は、「この小さいものに対してすることは、私に対してすることだ」と言って、人にすることは神にすることと同じだと教えておられます。ですから、人に仕えることができるとき、あなたは神に仕えているのです。それは神の言葉を食べられる状態になっているということです。

あなたは、自分の理性を王にして、自分が納得できればOKで、納得できないと怒りをぶちまけてはいないでしょうか。へりくだるとは、神を中心にするということです。ただ「神が言われるから信じます」と、受け入れ、神のことばを食べましょう。その言葉がどれだけあなたを強くし、励ますものであるか、体験して生きていきましょう。

このように、「弟子の足を洗う」という行為には、「神の言葉にとどまり、それを食べ、永遠のいのちを現実のものとしなさい」という意味が込められているのです。